

## P1-015

## 幼児の食事行動と保護者の食事に関する悩みおよび子育て観との関係

伊藤 優<sup>1)</sup>、鎌田 雅史<sup>2)</sup>島根大学 教育学部<sup>1)</sup>、  
就実短期大学<sup>2)</sup>

【目的】 幼児を育てる保護者は、日々不安感や満足感など様々な思いを持ちながら子育てを行っている。中でも、食事は日常的で、偏食や食事量など個人の嗜好や生理的行動を伴っていることから、多くの保護者が幼児の食事行動に対するかわりに難しさを感じることが報告されている。また、食卓を囲んで子どもと楽しく接することが、子どもとの関係性を深めたり、子育てに関する充実感を高めるような時間ともなる。このことから、幼児の食事に関する保護者の悩みは、食事の場面だけにとどまらず、保護者の子育てに取り組む気持ち全般（子育て観）に影響を与える可能性が推察される。そこで、本研究では、保護者を対象にアンケート調査を行い、幼児の食事への悩みと子育て観および子どもの食事行動に対する意識との関連について検討する。

【方法】 2019年10月～2020年1月に3歳以上児を育てる349名の保護者に対して質問紙調査を行った。質問紙調査の内容は、子育て観に関する16項目、食事場面での子どもの行動に関する22項目であった。加えて、子どもの食事に関して悩みを有しているかについても尋ねた。

【結果】 (1) 子育て観に関する因子分析を行った結果、3因子による解釈が妥当であると判断し、それぞれの因子について「苛立ち・不安」「負担感」「充実感」と命名した。同様に、子どもの食事行動に関して因子分析を行った結果、「遊ばず食べる」「上手に食べる」「残さず食べる」の3因子が抽出された。(2) 子どもの食事行動に関し、「遊ばず食べる」「上手に食べる」「残さず食べる」の尺度得点は、子育ての「苛立ち・不安」「負担感」と負の相関が認められ、「充実感」とは正の相関が有意に認められた。

(3) t検定によって、食に関する悩みが「ある」保護者と「無い」と答えた保護者の尺度得点の平均値を比較したところ、悩みが「ある」と答えた保護者は、子育て観における「苛立ち・不安」「負担感」の得点が高く、「充実感」の得点は低かった。さらに、子どもの食事行動において「遊ばず食べる」「上手に食べる」「残さず食べる」の得点が低かった。

【結論】 幼児の食事に関する悩みは保護者の保育全般の悩みに波及する可能性が示された。このことから、保育者は幼児の食事に関する悩みに寄り添うことの重要性を再確認し、保護者に丁寧な支援を行う必要性が示唆された。

## P1-016

## 日本スポーツ振興センター「学校事故事例検索データベース」を用いた、保育施設管理下における死亡・障害事例の検証

須藤 茉衣子<sup>1)</sup>、野村 理<sup>2,3)</sup>、加藤 承彦<sup>4)</sup>、竹原 健二<sup>1)</sup>国立成育医療研究センター研究所 政策科学研究部<sup>1)</sup>、  
国立成育医療研究センター教育研修センター<sup>2)</sup>、  
弘前大学大学院医学研究科救急・災害医学講座<sup>3)</sup>、  
国立成育医療研究センター研究所 社会医学研究部<sup>4)</sup>

【目的】 保育所を利用する児童数は年々増加しており、未就学児全体の4割以上に及ぶ。すべての子どもに一定水準の質や安全が保障された保育環境を提供することは重要な社会課題であり、保育政策の改善を主張するために、保育の現状や課題を提示するデータが求められている。本研究では、保育中の事故に注目し、既存のデータベースを利用して、事故の発生状況や傾向を把握した。

【方法】 日本スポーツ振興センターの「学校事故事例検索データベース」に掲載されている、災害共済給付の対象となった死亡・障害事例（平成17～29年度における保育所等での「保育中」の事故）を分析した。災害発生時の状況に関する自由記述の内容から、【事故事象】（死亡／意識不明・体調急変／外傷（転倒転落・衝突・接触）／ひっかかり傷／手足指切断／火傷）、【保育場面】（屋外活動中（施設内／施設外）／室内活動中／睡眠中／食事中／水遊び中）、【事故の主要因】（子ども本人／他の子ども／保育の状況／保育者／物理的環境）をそれぞれ分類し、児の年齢・保育場面・主要因別に、事故事象の発生件数を集計した。

【結果】 死亡事例49件、障害事例187件、合計236件を対象に分析した。年齢別に事故事象の発生件数をみると、1歳児の死亡事例が20件と多く（全死亡事例の4割）、障害事例だけでは、4歳児での発生件数が多い（52／187件）。保育場面別の集計では、死亡事例は睡眠中が最も多く（29／49件）、障害事例では室内活動中の外傷が最も多かった（60／187件）。主要因別に事故事象の件数をみると、他児から引っ掻かれることでの創傷の件数が最も多く（44／236件）、次いで自らの転倒・衝突による外傷が多かった（36／236件）。

【考察】 児童福祉法に基づいて定められた保育士の配置基準では、1歳児では（6：1）となっているが、発達の個人差も大きく、この基準が不十分であると見直しを指摘する声も多い。障害事例の発生件数が多い4歳児に関しては、保育士の配置基準が（30：1）と、1948年に規定されて以降、一度も改正されていない。また、0・1歳児では睡眠時における5～10分おきの呼吸チェックを推奨している自治体もあるが、職員体制によっては実施が難しい状況にある。保育事故の予防には、研修やマニュアルの整備といった各施設での取り組みだけでなく、保育所の設備に関する基準の見直しと、必要な財源の確保といった、政策的な課題も重要であることが示唆された。